



田中 伸武 さん

S 52 総合科学部 入学
S 57 中国新聞社 入社

新

聞作りは大まかに言っと、取材して記事を書いたり、写真を撮ったりしたものを与えられたスペースに分けていくという作業です。記者が書いた記事をいかに読んでもらえる形にするかというのが僕のいる整理部の仕事。見出しをつけたり、記事の幅、活字をどう使うかを決めたりする、いわゆる編集の仕事です。この作業によって読者が記事を目にとめるかどうかが決まるからね。どの記事を紙面に載せるかというのも大きなポイントで、記事の取捨選択と価値判断が重要になってくる。それをいかに正確に、早く、美しく表現して、一ページの中に記事をきちっと入れるか。

このニュースはこの大きさっていうバランスを考えながらはめこんでいくのが、編集者の腕の見せ所ですね。

・どのように仕事を進めていくのですか？

記事をまとめる際に、大枠はだいたい流れがあるし、どという記事はどの面に載せる、というのは新聞社によって決まっているから、膨大な記事も最初から機械的に分けていく。とにかく問題なのは記事の価値判断なんです。あとはスピード。締め切り時間までに印刷工場に届けなきゃいけないのに、やっぱり記者の中にはゆっくり書く人もいるし、長い記事を書く人もいる。

この編集という仕事は、胃が痛むし、夜眠れないこともあるけど、基本的にはおもしろい。ただ、どんなに気をつけていても、ミスすることたまにはある。だけど、新聞記事っていうのは読者に信頼してもらっているからね。それは今までみんなが間違いないの新聞を何十年も積み上げてきて、やっと得た信頼だから、そこには注意を払っているね。

学生生活

年生の時は52生の有志でミニコミを出してた。大学生になったら勉強し

なきゃと思いながらも、やっぱり友だちをつくりたくて、何かコミュニケーションの場が欲しい、って始めたのがミニコミ。月一回は出してたから忙しかったね。でもと



学生時代につくっていたミニコミの数々

にかく何か書きたいっていう思いが強かった。それとは別に広島で地域の人たちが、

東京でも学生同士でミニコミを作っていた。僕の大学生活っていうのは、何よりミニコミ作りで忙しかったかな。

サークルも自分たちで企画情報研究会とこのを作ったり、キャンプの時の手伝いや大学祭の実行委員をしたりもしてたね。

まあ、学生の時、「いかにモテるか」をよく考えてた(笑)。でも結局モテるために一番いいのは自分を磨くこと。だから、何か自分が一生懸命やることでモテるんじゃないかと思ってた。着飾ったりするのも一つの手だけど、そういうのに惹かれて付き合う人は長続きしなかったり、失望したりすることもあるから、自分を高めてぶつかり合える人間とね。

・学生時代に印象に残っていることは？

失敗したことの方がよく覚えてるね。中国新聞の夕刊にあったヤングのページで、正式な取材じゃないけど、ある会社の人の雑談話をおもしろいなあと想着って、記事にしたら、後で猛烈に怒られてね。人の話を聞くのはいいんだけど、ある程度鵜呑みにせず、話の裏はちゃんと取らないとね。ただ、基本的には突撃。とりあえず野次馬精神。表現がひどいとかって怒られたことはいっぱいあるけど、ただ、相手に配慮しすぎるとおもしろくない。その判断が難しかったね。こういう失敗談は僕にとつていい勉強になった。ギリギリのところできかに書くかというのがね。ま、未だに怒られることは多いけどね。

進路について

新

「進路も全然考えてなかった。よくモラトリウム人間だの、ピーターパンシンドロームだの、「若者は夢を抱かん」とか、「高校の時ちゃんと進路を決める!」とか言われるけど、でも無理だよな、やってみるとわからん。総科に入ったのだから、結局総科ってというのは出口が広そうだし、何に

でもなれそうだから来たわけであってさ。

だから、就職はあまり意識せずに過してた。そして、卒業が間近になって、文字を書いたり、人に会ったり、そんなことが仕事としてできるのは、新聞記者かなって思った。

総科とジャーナリズムは似てるかもしれないね。広く興味を持ってて、バランス感覚もある。そういう点で、新聞記者は総科と合ってる仕事かもしれない。

学生にアドバイスを

「つは、何にでも興味を持つ。そして、人を好きになる。やっぱり人が好きだったら会いに行くし、常に興味を持つし、話を聞きたくなる。そういう素朴な疑問と好奇心があればいいんじゃないかな。あと先生と仲良くなること。やっぱり大学の先生は知識があるしね。関係を作って、分野を幅広く興味を持って動くといいよ。」

それと、いまは失敗することだね。学生なら失敗してもある程度は許されるといふ面もあるし、何かしないと失敗もしない。あと、普段から文章を書くことに慣れておく。社会に出ると何かと書く機会が多いから、マスコミ志望でない人も書く練習をし

ておくよと役に立つと思つよ。

最後に一言

も

「のを大切にしよう!! 限りある資源を効率よく使って、この地球とつまくやっつけていこう。」

身近なものを大事にすることで、政治や社会のおかしいところに気づくかもしれないね。特に、今はものが多いから、少しでも効率よく使おうと心がけることで、論理的な思考ができるようになる。人間関係を大事にするのはもちろんだけどね。



取材風景～中国新聞社にて

(担当 16生 西川史保子)



入交 彦 さん

H 7 総合科学部 入学
H 15 広島大学大学院教育学
研究科心理学講座 入学

現

在は広島大学大学院教育学研究科心理学講座、心理臨床学コースに所属
して、平成十七年春から、岡山の病院で心理スタッフとして働くことになってい
ます。勤務内容は、病院のカウンセリング
ルームに来る人や契約先の企業に向いて
カウンセリングや研修を行なうことです。
そこでストレスへの気づきを促してその対
処法をアドバイスしたり、職場のストレス
の原因などを調査して企業の人と一緒に改
善策を考えていたりすることで、働く人
のメンタルヘルスを向上させ、元気に働け
るようサポートしていきます。

部

総科生のとき

活動は体育会のフェンシング部に所
属していました。人数が少なかつた
ので、初心者の方にとつてはやりやすい
だろうと思つたのですが、実際には、一
生から主務という仕事を担当し、時間を大
幅に拘束されて、予想外に大変でした。
学生時代の思い出としては、オリキャン
スタッフとしての活動があります。二回生
から四回生まで合計三回も参加すること
で、学年的な横のつながりだけでなく、縦のつ
ながりもでき、人脈が広がりました。中
でも最後に参加した班では、いまだに班活
があります。

また、旅行に行ったことも思い出深い
です。中国、台湾、フィリピンなど東南アジ
アが多かった。行き先として東南アジアが
多かったのは、総科に所属していた時の
副指導教官であつた浜渦哲雄先生の影響が
強いですね。先生のご専門はアジア経済で、
浜渦先生の主義が「現場で何が起きてい
るのか、その問題を肌で感じる」ということ
でしたので、先生が東南アジアへゼミ旅行
に行かれる時にはよく一緒にさせてもら
いました。

国内の旅行先では沖縄にはまりました。

沖縄は人も環境も食べ物も良く、その魅力
に取りつかれました。

回り道

最

初は、ゼミの指導教官の李東碩先生
に勧められ、学んでいた国際経済学
をさらに深めようと、大学院進学を考えま
した。しかし、本の上での知識だけでは経
済がどう動いているか実感がなく、しつこ
りきませんでした。一度社会に出てみない
とわからないのではないかという思いもあ
り、結局、進学をやめ就職することにしま
した。

いざ就職先を考える時に、「せつかく経済
学を学んだのだから」と、そのことと結び
つくような職業を意識しました。結局、一
つ目は金融・投資関係の会社に、二つ目は、
ずっと住みたいと思つていた沖縄で経営コ
ンサルティングの会社に入りました。しか
し、一つ目の会社では、仕事に達成感が持
てず、また自分自身がこの仕事を続けて成
長できるのだろうかという不安を感じるよ
うになり、半年あまりで退職しました。二
つ目の会社では、自分自身の専門性を磨く
ことを意識し、仕事に没頭しましたが、過
労や職場内の人間関係がきっかけで、そこ

も二年ほどで辞めてしまいました。

しかし、二つ目の会社にいる間、経営者と会って話を聞く上で、本音を引き出す技術を磨くための勉強をしようと思い、カウンセリングを学ぼうと考えました。そこで産業カウンセラーという資格があることを知り、やがてカウンセリングという人との関わり方が自分に合っているのではないかと思うようになりました。そこで退職を機に臨床心理士になるため、広大の大学院に入りました。

こんな風に次から次へと切り替えができたのは、親の理解と相談できる相手がいたことがあります。また、浜渦先生からも、「仕事に就いても、自分には合わないと思ったら、すぐに方向転換できる身軽さをもっておけ」と常々言われていた、ということもありました。

私の就いた金融・投資や経営コンサルタントという業種は、資産を持っている人を相手にする職業です。言い換えればそれは、強者の立場にたったものです。それとは逆に、カウンセラーは弱者の立場にたった職業だと言えます（弱者、強者という表現が適切かどうかはわかりませんが）。この「弱者の立場にたつ」ということを教

えてくれたのは李先生です。これは私自身のアイデンティティの柱の一つになっています。

カウンセラーとしての心構え

カ

ウンセラーとして、「私はあなたではないので、あなたの悩みを100%理解することは不可能」ですが、あたかもその人自身であるかのように感じ取るといふ姿勢が必要です。相手の気持ちが変わらない時でも、その人に話を聞いてくれる人がいると思ってもらうことで気持ちを楽にすることが出来ます。

カウンセリングをする際に、相手に構えさせないことも大事ですね。私はよく硬いという印象を感じさせるそうなので、カウンセリングを指導してくださる先生からは「不倫の相談をしてももらえるくらいになりなさい」と言われてしまいます。相談に来られる人に心をオープンにしてもらえる態度は、一生をかけて磨いていこうと思っています。

学生へのアドバイス

回

り道をするには無駄な事ではありません。モラトリアムというのは学

生の間だけでなく、社会に出てから続くこともあると思います。私の場合、長く悩んだ分、いま目指す方向をしっかりと持てている気がします。

社会に出てから本当の勉強が始まる、ということもあります。そこで芽生えた新たな興味を再び大学で勉強しなおすのも一つの手ですよ。とにかく、体を気にせずいろいろなことにチャレンジしてください。また、学生の間にはできないことをぜひ見つけてください。

最後に一言

人

に相談をしてください。友だちでも誰でも。思いつかなければ、大学にもピア・サポート・ルームがあります。相談できる場所、帰れる場所があるというのは心の支えにもなります。悩みがあるとき、ないとき、そういった人や場所を活用してください。それがカウンセリングの敷居を低くすることにもつながります。カウンセラーはみなさんが思っているより、もっと身近な存在ですよ。

(担当 16生 森尾陽一)

このコーナーは他 16生 中本実穂 廣川千恵が担当しました。